

## ヴェトナム・スレ集団での社会変動モデルの適用性 ラムドン省での事例から

著者	本多 守
著者別名	HONDA Mamoru
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
号	47
ページ	125(108) - 138(95)
発行年	2012
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00004421/">http://id.nii.ac.jp/1060/00004421/</a>

# ヴェトナム・スレ集団での社会変動モデルの適用性

——ラムドン省での事例から——

本 多 守

## はじめに

ヴェトナムではフランス植民地期からヴェトナム社会主義共和国が1979年に公定するまで、何度も民族分類作業が行なわれてきた〔本多守 2011a〕。

筆者が、2004年から現在まで調査を続けているラムドン（Lâm Đồng）省における焼畑農耕民であったエスニック集団、モンクメール系コホー（Cơ Ho）族チル（Cil）<sup>(1)</sup>集団は、現在まで民族分類においてはコホー族の地方集団として扱うべきか否かで論争が絶えないエスニック集団である〔Phan Ngọc Chiến 2005：211-239〕。本稿では、チル集団ともう一つのコホー族の地方集団であるスレ（Srê）集団（自称チャウ スレ（*Cau Sre*）意＝水田人）の関係、及びスレ集団間関係を扱う。

学位論文では、チル集団を調査対象としてジュネーヴ協定以前、以降、革命後、ドイモイ後の各段階における外因的変化から婚姻連帯拡大型モデルという社会変動モデルを提示した。主たる調査地の行政村内に居住していたのはチル集団のみであったため、隣接するエスニック集団との関係については若干の婚姻事例を扱ったのみだった〔本多守 2011a〕。本稿では調査地に居住するスレ集団を対象に学位論文で提示した時代区分で、スレ集団の社会変動を明らかにしながら、スレ集団の視点からチル集団との関係を明らかにし、さらに同じ行政村でありながら二つに分かれているスレ集団間関係を考察する。



図1 調査地地図（ドックチョン県行政区分地図を改変）

調査地であるG村では、スレ集団とチル集団が混住している。さらにスレ集団は二つの集落出身の成員で構成されていた。考察の結果、異なるエスニック集団において、筆者が提示したモデルが、部分的にはあるが適用できる事例が存在することが明らかとなった。

## ・調査の概要

ヴェトナム国家大学人文社会科学大学ホーチミンシティ校人類学部のファムタントーイ（Pham Thanh Thôi）氏の同行を得、2012年8月27日から14日間ラムドン省ドックチョン（Đức Trọng）県リエンヒエップ（Liên Hiệp）社<sup>(2)</sup> G村6組のうち、コホー族の居住する3、4、5組をフィールド調査した。調査言語はヴェトナム語、少数民族語併用で行なった。

・本稿の構成は以下の通りである。

## I. スレ集団について

スレ集団について、ヴェトナム研究者によるスレ集団の特徴について概観する。

## II. 調査地の概観と形成過程

調査地においても、学位論文で提示した時代区分①ジュネーヴ協定以前、②ジュネーヴ協定以降、③革命後、④ドイモイ後、の各段階における調査地の大きな外因的变化による社会変動について詳述する。

## III. 調査地の経済活動

調査地における生業が集団ごとにどのように変遷してきたかを時代区分に従い、インフォーマントの語りから明らかにする。

## IV. チル集団とスレ集団間の婚姻関係

ここでは、チル集団のスレ集団の婚姻事例から調査地に存在する2つのスレ集団間との交流の違いを明らかにする。

## V. スレ集団間の婚姻関係

ここで、2つのスレ集団間の婚姻データを分析し、インフォーマントの語りから2集団の関係を明らかにする。

## I. スレ集団について

前述したように、スレ集団はチル集団と同様、1979年にヴェトナム政府によって公定されたコホー族の一地方集団である。ヴェトナム国民は皆人民証明書という省人民委員会が発行するIDカードを持っている。そのIDカードには民族籍記載欄がある。筆者が研究対象としてきたチル集団は本来ならコホー族という公定民族に属するので、民族籍にもそう記されねばならないが、チル集団は自分の集団名が民族籍記載欄に記されたIDカードを持つ。一方、本稿で扱うスレ集団は、公定民族名であるコホーが民族籍記載欄に記されている。

現在のコホー族に関する研究書は、ほとんどがすべての地方集団をまとめて扱ってしまっている[(例) Bùi Minh Đạo (ed) 2003]。そのため、個々の集団ごとについては特徴を把握しにくい。このような研究書の中で、1972年に出

版されたグエンチャクジーの記録は、コホー族はチル集団と別のエスニック集団として扱われている。この書によれば、当時のコホー族の特徴と当時の状況が次のように書かれている[Nguyễn Trắc Dì 1972: 48-51]。以下、抜粋、要約である。

ここ数年でコホー族は都市の近くや交通の要衝近辺に居住し、キン族とよく接触するようになったので、進歩の度合いが著しい。以前コホー族は藍染の褌、クロと呼ばれる服……男女ともに首飾り、銅の腕輪、削歯、耳飾りをしている。

集落には一人の代表者がおり、それは威信者であり族長である。勇敢、雄弁で、外部の人と交渉や、政権との連絡役を務める。60歳を超えた両親は、なにも権力がなく、母方のリネージの長の子が代理を務める。コホー族の各家庭は個別に小さな高床の家に住む。高床の脚部は、ほかの民族のものよりも高い。家の中は部屋があり、客室や寝室もある。

女性が男性を好きになると、両親に言って仲人を頼み、双方の理解のために訪問する。もし男性が同意し、リネージの長が認めれば、女性側は婚礼の時に男性側に贈るものを準備し始める。結婚後夫は妻方に居住し、その子供たちも妻方の姓となる。……集落内に死者が出た時は、集落全体が労働に行ってはいけないという禁忌がある。

どの葬礼に参加する家庭も一人の代表者を選んで、死に装束、服を準備する遺族を手伝う。また遺族を手伝って豚肉、水牛、鶏を準備し接客をする。2-3日後に埋葬される。コホー族は財産の分割を行わない。しかし死者の生活用品は棺桶の中に入れられる。埋葬が順調に終了後、参加したすべての代表者たちは喪主の家に戻り、服を洗い、喪主のお礼の言葉を聞いた後に、家に帰る。コホー族は依然として家族墓の慣習がある。大家族は一つの家型の墓を持ち、一族のすべての人々はその墓穴に埋葬される。

もし妻が死ねば、妻の妹がその財産と子供の養育する権利を持つ。夫は実家に帰る権利を持ち、1年後、異なる妻をめとることができる。

コホー族は水稻耕作を知っているので、生活は固定されているが、耕作方法は原始的なので多くの利益が上がる程収穫はできない。

以上の他に、宗教については、スレ集団はチル集団と同様に神霊ヤーン (yang) 信仰<sup>(3)</sup>であった。それが現在では、おおざっぱにいうと、チル集団がヴェトナムプロテスタント聖会 (以下プロテスタントと略)、スレ集団がカトリックと分かれている。

言語面では、コホー族内部集団間で地方差は若干あるものの、相互理解可能であると一般的にいわれている。しかし、スレ集団の多くのインフォーマントは、チル集団との意思疎通はヴェトナム語を用いない場合、なかなか困難だという。生業に関してチル集団は非定住型焼畑輪耕でトウモロコシ栽培を行っていたのに対し、スレ集団は定住して水稻耕作している。そしてスレ集団は、焼畑耕作を生業とするエスニック集団を、「チャウ ミール (Cau Mir)」つまり「焼畑人」と呼び、自分たちと異質な、流浪の焼畑の民で、自分たちより文化レベルの低れた者として扱った。

このようにスレ集団とチル集団はコホー族というラベリングがなされてはいるものの、そのラベリング以外同じ集団に属するという意識はない。チル集団とスレ集団の婚礼、葬礼などの慣習については、Ⅲ章で改めて扱う。

## Ⅱ. 調査地の概観と形成過程

### 1. 調査地の産業と人口

ドックチョン県の歴史や産業など詳細については [本多守 2012] で扱っているので、本稿では調査地のあるリエンヒェップ社と調査村 G のみを扱う。

調査地のあるリエンヒェップ社は西にラムハー (Lâm Hà) 県と接し、南にヌトルハー (N'

thol Hà) 社、東にヒェップタイン (Hiệp Thanh) 社と接する (以上図 1 参照)。

リエンヒェップ社の産業は農業が中心で、各種耕作面積は次の通りである。水稻29ヘクタール、野菜366ヘクタール、花29ヘクタール、トウモロコシ5ヘクタール、桑222ヘクタール、コーヒー1,058ヘクタール。この他に養豚26,000匹、養水牛154頭、養牛360頭 (このうち乳牛57頭) などその他家禽を合わせて総計で105,000匹が飼育されている。林業については国の森林保護政策から行なわれていないが、民族戸12戸がそれに違反して5.2ヘクタールを開拓している。G村では採石業者が進出している [UBNDX Liên Hiệp 2012]。

リエンヒェップ社は7つの行政村で構成されるが、このうち5村がキン族の集落、1村が華人、ターイ族の村、そして調査対象のG村には、キン族、スレ集団、チル集団が混住している。

G村は6つの組に分かれる。1組 (48戸 250人)、2組 (24戸 80人 1戸のみコホー)、6組 (28戸 120人) にはキン族が住む。1組、2組のキン族は、1954年に移住してきたキン族の人たちが耕作していた土地を購入した、革命後自由移民としてクアンナム、クアンガイ、ビンディン省からきたキン族である。6組は少数民族から土地を購入した (86年)、クアンガイ省からの自由移民のキン族が居住し、1994年に成立した。

3組にはカンレオ集落出身スレ集団51戸、4組にはワット (Woat) 集落出身スレ集団22戸とチル集団24戸合計46戸、5組にはチル集団15戸とワット集落出身スレ集団 22戸 チュルー族 1 戸合計38戸、このほかに開拓地36ha 地区<sup>(4)</sup>にチル集団58戸、スレ集団36戸、チュルー族 1 戸、合計95戸が居住している。3、4、5及び36ha 地区に合計で231戸の民族戸がある。この他に各組に数戸のキン族の商人が居住している。

表1 G村組, 地区集団別人口表 (2012)

集団名\組・地区	3		4		5		36ha	
	戸	人	戸	人	戸	人	戸	人
チル	0	0	24	183	15	146	58	400
スレ	51	338	22	175	22	148	36	196

## 2. 調査地成員の形成過程

以下、複数のインフォーマントとの聞き取り調査から得た情報をまとめたものである。

調査地G村の領域は、少なくとも仏領期にはスレ集団のカンレオ (Konriau) 集落の領域であり、南はコグラム (Kogram) 集落の領域、西はヌハバール (N'ha Bar) 集落の領域、北はダラヌン (Đa Ronung) 集落の領域と接していた。これらの集落はいずれもスレ集団の集落である。

スレ集団のうち3組はスレ集団のカンレオ集落出身者で今も構成されている。4組, 5組に居住している人々は、現在のラムハー県ナンバン (Nam Ban) 町西方にあるワット集落に居住していた人々である。それが戦争を避けて現ナンバン町領域にあったヌハバール集落に移動 (65年)。そしてそこで戦略邑が建設され、その地にいたチル集団のボンジャー (Bon ja) 集落の人々<sup>(5)</sup>、ヌハバール集落の人々とともに収容された。しかし戦火が拡大して危険になると、そこにいた人々は皆カンレオ集落に移動し戦略邑が建設されたのである (68年)。同じ頃ダラヌン集落の人々もカンレオ戦略邑に来ていた。革命後、ダラヌン集落の人々は原住地に戻り (全5戸)、生産集団解体後、ボンジャー集落の人々とヌハバール集落の人々は現行政村領域より原住地のあるラムハー県へと移住したが、ワット集落の人々は原住地がキン族の新経済区になってしまい、帰村不可能となったため、現在この行政村にとどまっている。

チル集団はハンフット (Hang Hót) 集落の出身者がほとんどである。ハンフット集落の移動の歴史は次の通りである。ハンフット集落は、現ダンカノ (Đăng K'Noh) 社のマンボウ

(Măng bơ) 山近くにあったが、病に冒されたため、現在のラムハー県ナンバン町 (民族名ヌハバール) に移動した (1962年)。64年にはスレ集団の領域であるカムリー (Cam Ly) に移動し、66年ヌトルハー社のダメ (Đa Mê) 戦略邑に入った。68年ダンジャデッ (Đăng Ja Đih) B村に移動したが生活は困窮を極め、現ダンカノ社のハンフットに戻った (75年)。しかし、居住地の政情が不安定<sup>(6)</sup>なのでダンキア (Đăng Kia) に移動することとなり、さらに76年一部が分裂してダンジャデッへ移住した。ダンキアに残留組は、生活苦から、土地を探して一部はG村に移住 (これがチル集団の最初の移住となる、1977年 7戸)、また一部は現ダムロン (Đam Rông) 県ダムロン (Đa Mrong) 社ダロン (Đa Long) 村に移住した (82年)。しかしそこでも生活ままならず、G村に徐々に移住し<sup>(7)</sup>現在に至る。一方、ダンジャデッ組はパンティン (Pang Ting) に移住 (77年)。しかしそこでマラリアに集団感染し、79年現ラムハー県メーリン (Mê Linh) 社チムクット (Cim kut) 村に移動して現在にいたっている。

## 3. 調査地の宗教

ヌハバール集落にあった戦略邑 (1964-1968) には、カトリック教会があり、ボンジャーの人々とヌハバールの人々はカトリックに改宗していた。ヌハバールの戦略邑に入って、その後、調査地に居住しているワット集落の人々も、この時点ではカトリックに改宗した。

1968年に建設されたカンレオ集落の戦略邑には、カトリック教会とプロテスタント教会が設立された。移住した時点では、カンレオ集落の人々はヤーン信仰を維持していたが、次第にカトリックに改宗していった。一方、ワットの人々は大半がプロテスタントに改宗した。75年にワット集落15戸中9戸がプロテスタント、6戸がカトリックだった。

革命後、75年から84年までは少数民族地域で





写真1 1984年に作られた私設礼拝所



写真2 アンホアカトリック教会

のキリスト教の活動はプロテスタントもカトリックも全面禁止され、教会は全部接収され、解体された。ワット集落のうち当初プロテスタントに改宗していた9戸は、この禁止とともに無宗教となり、95年以降、順次カトリックに改宗した。

プロテスタントについては、1968年以降、カンレオ戦略邑の信徒管理者はダメ戦略邑にいる牧師であったが、革命後はそれもできなくなった。1984年に移住してきたチル集団ハンフット集落の牧師によって、プロテスタントが再度布教された。1986年、牧師は自宅のある4組で礼拝所を作り、今もここで礼拝が行なわれている。

現在、カトリックの礼拝はアンホア（An Hòa）村にある教会<sup>(8)</sup>で、キン族の神父により日曜日の8時から10時に少数民族対象に行われる<sup>(9)</sup>。

表2に集団別信徒数を提示したが、これを集

落出身者別で考えると、カンレオ集落にはカトリックしかいないので、スレ集団のプロテスタント5戸はワット集落の出身者である。チル集団の4戸は91年ボンチュオイ村に移住しなかったボンジャー集落の人々である。

表2 集団別信徒数（2004）

	カトリック		プロテスタント		合計	
	戸	人	戸	人	戸	人
スレ	94	664	5	48	99	712
チル	4	38	68	514	72	552
合計	98	702	73	562	171	1264

### Ⅲ. 調査地の経済活動

ここでは、最初に各時代区分による経済活動の変化を最初に聞き取り資料から明らかにする。

#### 1. 各時代区分における経済活動

##### ①ジュネーヴ協定以前

ここはカンレオ集落のみが存在した。カンレオ集落の成員は天水田による水稻耕作と水牛の飼育を主たる生業としていた。

##### ②ジュネーヴ協定以降

1968年からボンジャー、ヌハバール、ワット、ダラヌン集落の人々が移動してきて戦略邑が建設され集住するようになった。カンレオの人々は自分たちの所有する水田で耕作を行ない、ボンジャー、ヌハバール、ワット、ダラヌン集落の人々は土地をその領域の地主であるカンレオ集落の人々から借り、森を切り開いてトウモロコシの焼畑輪耕で生計を立てていた。また、1954年に移住してきていたキン族の土地の一部が収容され、ボンジャーに与えられた（現2区）。カンレオ集落の所有する水田に対しては1971年に土地所有権利証が共和国政府から発行された（写真3）<sup>(10)</sup>。

##### ③革命後

革命後すぐに、ダラヌン集落の人々は原住地に帰った。1976年からカンレオ集落の所有領域

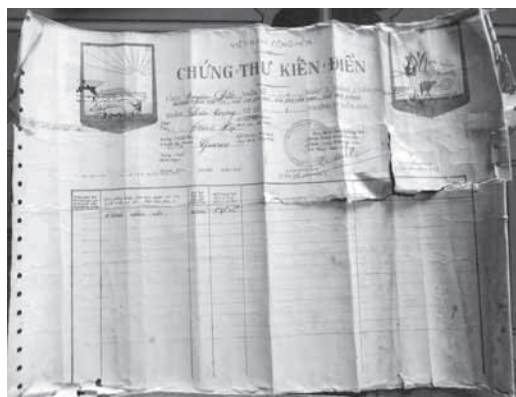


写真3 共和国政府発行土地使用権証

は革命政府によってすべての所有権を否定され、生産集団に吸収された。生産集団はG村で4つ組織された。第1生産集団はヌハパール集落の人々とキン族、第2生産集団はボンジャー集落の人々、第3生産集団の人々はワットの集落の人々と7戸のハンフット集落の人々<sup>(11)</sup>、第4生産集団はカンレオ集落の人々が参加した。水稻耕作、サツマイモ栽培がおこなわれたが生産量が低く、多くの人が外部に働きに出ていた。1984年ダンキアからハンフット集落の人々が、カンレオ集落の長老から森林開拓許可を得て多数移住してきた。そして生産集団に参加して水稻耕作を行なう一方、森林を開拓してトゥモロコシの輪耕を行ない始めた。

#### ④ドイモイ後

1989年、生産集団は解体し、各戸はその世帯人数によって1.5－2サオ<sup>(12)</sup>の居住地、畑作地が配分された。こうした中、ヌハパール集落の人々は人口増加と水牛、牛の病死でカンレオ集落の人々に土地を返却して居住地に戻り、ボンジャー集落の人々は91年に現在のラムハー県マーリン社ボンチュオイ (Bon Chuói) 村に移住した。ボンジャー集落の人々は帰る前に、カンレオ集落の人々に土地を返却し、別れの宴を催した。また、同時に分配されていたキン族の土地をキン族に返却した(現在の2組の地区)。1995年、G村全民族戸95戸に対し2.5サオの水田と2.5サオの居住地が社の人民委員会から配

分された。この時点ですべての民族戸が水田と畑作地を持つこととなった。

しかし、カンレオ集落の人々が同村の移住者、すなわちチル集団とワット集落の人々に対し配分された水田の利用権を、革命前の権利証に基づいて主張した。移住者たちはすでに利用権証が行政機関から発行されているにもかかわらず自主的に返却した。

1985年から国の援助によってコーヒー栽培がはじまり、1990年からコーヒー栽培が本格化した。トゥモロコシがまだ主流で、各戸のコーヒー畑面積は1ヘクタール程度あった。水田の価値はコーヒー畑と比べ相対的に低かったので、移住者の人々はカンレオ集落の人々に水田の返却を要求されても、抵抗しなかったようである<sup>(13)</sup>。行政側も何の対応もしなかった。現在G村の少数民族地区には約190ヘクタールの水田があるが、カンレオ集落がそのほとんどの使用権を持ち、1戸当たり最低でも1ヘクタール、最大で6ヘクタールの水田を保有している。

また、移住者たちはカンレオ集落領域内の森林を開拓し畑作地を保有しているが、以降、カンレオ集落の人々に自己所有地だという主張、返却を要求され、しかたなく返却するという状況が現在まで続いている。

2005年、社人民委員会はカンレオ集落の人々に返却された水田の利用権証を移住者たちから回収し、2006年から3区(18戸)、4区、5区の家を持たない若年層の家庭93戸に新たに居住地として36ヘクタール地区の土地1.2から2サオを交付した。36ヘクタール地区では1995年以降、行政側が200本のコーヒーの苗を援助したのを皮切りに、耕作地がコーヒー畑になっていたが、この耕作地の一部を接収して居住地として各戸に分割して再交付したのである。同時に各戸に対して約600万ドン分の建築材料費(セメント、レンガ、トタンなど)が支給された。居住地の交付後、耕作地の配分はされていない。3区の人々は近隣のカンレオ集落の水田を

耕作している。現在36ヘクタール地区では130戸<sup>(14)</sup>が居住している。

また、36ヘクタール地区では、2002年には林業公社が周囲の山間部で松を植林を開始して耕作地が制限され、2008年には省の許可を得た私企業が、旅行区域（名称 Dalarou）を建設するために周囲の67ヘクタールに松の植林を開始した<sup>(15)</sup>。またしてもここで耕作していたチル集団の人々は不法耕作地とはいえ、土地使用を制限されているのである。

## 2. 現在の生業事例

### ・カンレオ集落スレ集団の事例 A

世帯主（1962年生）家庭内に3人の労働者がいるケース

1ヘクタール以上の水田（1期作）と、1ヘクタールのコーヒー畑、牛、豚の飼育。

### ・カンレオ集落スレ集団の事例 B

世帯主（1965年生）夫婦は水田3.22ヘクタールを保有していた。世帯主には4男2女があり、2男1女はすでに既婚している。息子のうち一人は妻が末娘だったので婚出している。残りの1男1女夫婦は両親と同居しているが、1男夫婦は両親の所有していた水田2サオ、1女夫婦は1サオの水田を結婚してもらっている。収穫は1ヘクタール当たり6トンある。

### ・ワット集落スレ集団の1事例

世帯主（1957年生）夫婦とその子供の3夫婦が同居している。水田2期作4サオ、トウモロコシ畑1サオ、コーヒー畑4サオ、このほかに13頭の水牛を飼育している。水田はカンレオの領域ではなく、自己開拓地である。

### ・チル集団の1事例

世帯主（1938年生）夫婦とその娘夫婦、そして孫娘夫婦と3夫婦の家族が同居している。世帯主夫婦には1人、娘夫婦には3人、孫娘夫婦には3人の子供がいる。世帯主夫婦はコーヒー

畑1ヘクタール、娘夫婦はコーヒー畑1.5ヘクタール、この他に世帯主夫婦の息子夫婦が36ヘクタール地区に居住しているが、2002年結婚後1ヘクタールを開拓してコーヒー畑にしたところで、カンレオ集落に所有権を主張され返却（2012年初頭）。現在耕作地を失った状態である。この他に世帯主夫婦は2000年までは牛を3頭飼育しており、その売却費によって家屋を新築している。

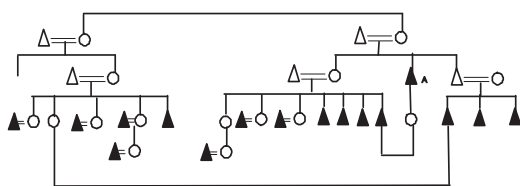
## 3. チル集団の生業における強い紐帯の事例

2012年6月、ラクユオン県ダンカノ社で不法耕作をしていたG村民20戸のチル集団の人々と、メーリン社チムクット村民12戸のチル集団の人々が、行政機関によって各村に連れ戻されるという事件があった。詳細に調査した結果、この事件はチル集団の強い紐帯を示すものであった。

G村にいるチル集団のほとんどがハンフット集落の人々であるが、既述したように現在チムクット村にもハンフット集落の人々がいる。G村に居住するハンフット集落の人々はチムクット村に居住するハンフット集落の長老<sup>(16)</sup>2人（1942年生、1949年生）、そしてドンジュオン県トゥーチャー社に居住するハンフット集落出身の長老（1947年生）に従い、旧集落のあったダンカノ社に行き、旧集落の各ムポール所有地を再開拓、耕作し、トウモロコシを栽培していたのだった。長老3人は旧集落で不法耕作を2009年から始め、集落の人々に耕作可能であることを知らせたのである。チル集団の耕作地はムポールごとに分けられており、一旦耕作すれば、その耕作権は失われない。その耕作権を管理するのは長老である。3人が長老であり、各ムポールの使用権可能な土地を知っていたので、人々は従ったのである。この3人の長老＝指導者は、伝統的な集落の長老で行政機関に属するものではない。そして、この事件は、現在でも集落の紐帯が行政村の境界を越えて存在することを明らかにしている。紙面上詳細には無



理だが、ここにG村民参加者（一部）の系譜の略図を示す。



\*A がドンジュオン県に居住する長老。

図2 不法耕作参加G村民（一部なし）

G村民20戸のうち、図2のように、長老のムポール出身者が6名、その姻族で、異なるムポールの者が10名、この他に未記載の長老と血縁をたどることが確認できていない同じムポール出身者が1名とその姻族2名、不明1名が参加者である。

このようにチル集団の紐帯が強力なことは明らかであるが、裏を返せば、同じ行政村同じ組内に居住するワット集落出身のスレ集団との経済関係が薄く、非常に閉鎖性が高いことがうかがわれるのである。

#### IV. チル集団とスレ集団間の婚姻関係<sup>(17)</sup>

筆者は、学位論文第7章でチル集団と他のエスニック集団間の婚姻を忌避する要因として a, 婚礼と贈答の慣習の違い, b, ムポールの存在, c, 宗教（異なる宗教）をあげた。婚姻をもたらす要因として d, 生業の共通化, e, 宗教（強制的婚姻数の低下）, f, 配偶者が孤児だった事例, g, 就学と教育, h, 土地不足と土地法の改正をあげた。これらの要因がG村で適用可能か、インフォーマントの代表的な回答から検討してみる。

##### 1. 婚姻事例

チル集団とスレ集団の婚姻は非常に少ない。ワット集落のスレ集団とハンフット集落のチル集団は同じ組（4, 5組）の中で混住しているにもかかわらず、ほとんど交流がない。カンレ

オのスレ集団とチル集団についても同様である。筆者の調査では、次の2つの事例があるのみである。

##### ・事例1

ワット集落の男性（1964年生）は孤児だった。1967年、彼は戦争のため、養父母と一緒にワット集落から現ストルハー社のダメ戦略邑に移住した。ここでプロテスタントに改宗した。68年、カンレオ戦略邑へ移住した。革命後、1984年に移住してきたチル集団の中に今の妻がいた。そして好きになってすぐに結婚したのだ。結婚前には養父母のうち養父も死去していた。自分の家は貧しくて何もなかったので、婚礼では女側がすべて準備してくれた。準備されたものは首飾り、腕輪と会食用の鶏だけである。

##### ・事例2

もう一つの事例は、上記の事例1の娘（1991年生）と両親のいないカンレオ集落の女性とヌハバール集落の男性との間に生まれた息子（1988年生）との結婚（2010年）である。息子を含めてその兄弟姉妹9人中、4人が大学（短期大学も含む）卒業、あるいは就学中である。婚礼は同棲期間があったために教会でなく、嫁の自宅で行なわれた。嫁の家はプロテスタント、婿の家はカトリックだったが、本来ならば両家が協議するはずの宗教に基づく婚礼もなかった。婚礼の際はチル集団の慣習に従い花婿代償が花婿の家に贈られた。

##### 2. 婚姻の少ない理由

チル集団とスレ集団間の婚姻が極端に少ない理由について、各集団のインフォーマントたちは次のように答えている。

・チル集団の回答1 インフォーマント（1938年生）

葬礼の慣習が違うんだ。スレ集団は配偶者が死ぬと、残された配偶者は非常に大きな葬礼を催して、みんなで水牛を食べるんだよ。これをしてしないと嘲笑されてしまうんだ。我々は水牛を

食べることはほとんどないよ。

それにスレ集団はもともとここにいた人たちだけど我々は移住組だ。財産も少なく、昔は貧しい者として嘲笑されていたから彼らとの結婚はほとんどないんだ。

・チル集団の回答2 インフォーマント（1962年生）

チルは焼畑、スレは水稻で、生業が違う。それに婚礼では、チルは男側が豚を準備するだろ？でもスレの場合、男側は水牛をあげなければいけないんだ。男の価値も違うんだよ。チルの場合、男の価値は3,000-5,000万ドンで、婚礼の時に金を要求するだろ？一方、スレだったら500-600万ドン。全然違うんだ。それにチルは婚礼費用を男家が一部負担するけど、スレの場合は女家だけ。これだけちがうのさ。

・スレ集団の回答1 カンレオ集落インフォーマント（1962年生）の回答

婚礼では我々の場合、女家が準備するのは水牛、布、首飾り、腕輪だけど、チルの場合は甕、銅鑼に加えて、首飾りが大量にいるだろう。それに我々の葬礼は踊って、銅鑼をたたき、酒を飲み、食事をし、死後7日目に、サパティ（Sah Patih）という儀礼をするんだ。これは威信者や金持ちだけだけどね。水牛を食べるのさ。それは盛大なんだ。チルはこんな慣習ないだろ？でもこの慣習も革命前までだったな。そのあとではできなくなった。

・スレ集団の回答2 カンレオ集落インフォーマント（1965年生）の回答

生業が違うだろ？あっちは畑作、こっちは水稻耕作。それに宗教が違うよ。こちらはカトリック、あちらはプロテスタント。自分の息子が結婚してもカトリックからプロテスタントへの改宗はダメだ。受け入れられない。それにあいつらはまだ交叉イトコ婚をしている。我々は75年には捨てたんだよ。

・スレ集団の回答3 ワット集落インフォーマント（1962年生）

ワットは水稻、チルは焼畑、話し方も服装も違うだろ。婚礼や葬礼の習慣も違うんだよ。

（ここで筆者はそのすべての違いは今ではキン化によってほとんどがなくなっていると問い詰めてみた）

一番の問題は彼らが交叉イトコ婚を未だにしていることだよ。神父はもし新郎新婦の血縁関係が近ければ、結婚も許さず儀礼もしないんだ。ヴェトナムの法にも触れるじゃないか。

以上の回答から次のようなことがいえる。忌避する要因としてあげたa, b, cの要因は、G村でも適用可能である。もたらす要因として挙げたe, f, gも適用可能と考えられる。事例1でf, 事例2でgが適応できる。しかし、dやhについては、適用は難しい。少なくともワット集団は水田を失いコーヒー栽培をする点でチル集団は生業が共通化しており、双方とも移住民であるので土地不足は同じだからである。それでは次にスレ集団でも水稻耕作を行なうカンレオ集落とコーヒー栽培を行なうワット集落の婚姻事例について検討してみる。

## V. スレ集団間の婚姻関係

ワット集落の人々と、カンレオ集落の人々の間での婚姻事例について検討してみる。筆者の調査で、次の通りワット集落とカンレオ集落の婚姻事例がかなり収集できた（表3参照）。各インフォーマントに聞く限り、ワット集落とカンレオ集落間の交流は、戦略邑が建設されるまでは、ほとんどなく婚姻関係もなかった。最初の関係と言われているのが表3 No.1の婚姻である。それではなぜワット集落とカンレオ集落の人々の間で婚姻が増えてきたのか検討する。

### 1. 婚姻忌避要因としての宗教

ここでは、ワット集落とカンレオ集落の婚姻について宗教がどのようににかかわっているか検

表3 ワット集落カンレオ集落間婚姻事例

	夫			妻			結婚年
	生年	所属	宗教	生年	所属	宗教	
1	1937	ワット	Ndu	1942	カンレオ	Ndu	1969
2	1961	ワット	Ndu	1953	カンレオ	Ndu	1976
3	1960	ワット	TL → CG	1961	カンレオ	CG	1988
4	1962	ワット	TL → CG	1962	カンレオ	CG	1981
5		ワット	TL → CG	1962	カンレオ	CG	1980
	1956	ワット	CG				1996
6	1982	ワット	CG	1986	カンレオ	CG	2002
7	1977	ワット	CG	1977	カンレオ	CG	2002
8	1968	ワット	TL → CG	1967	カンレオ	CG	1989
9	1975	ワット	TL → CG	1974	カンレオ	CG	1993
10	1976	ワット	TL → CG		カンレオ	CG	1996
11	1984	ワット	CG		カンレオ	CG	2011
12	1974	カンレオ	CG	1977	ワット	CG	1994
13		カンレオ	CG		ワット	CG	
14	1972	カンレオ	CG	1970	ワット	CG	1992
15	1982	カンレオ	CG	1985	ワット	CG	2005
16	1982	ワット	CG		カンレオ	CG	2011
17	1977	ワット	CG	1974	カンレオ	CG	2000
18	1977	ワット	CG	1980	カンレオ	CG	1999
19	1986	ワット	CG		カンレオ	CG	2008
20	1986	ワット	CG		カンレオ	TL → CG	1984-98
*		カンレオ	Ndu		ワット	Ndu	

\*TL はプロテスタント、CG はカトリック、Ndu は伝統宗教を意味する。

討していく。

No.1, No.2の夫婦が結婚した当初は、まだ伝統的な信仰を捨てていなかった。No.1は結婚後カトリックに改宗。No.2は、結婚後プロテスタントに改宗したが、2000年頃カトリックに改宗する。No.3は夫がプロテスタントからカトリックへ結婚を機に改宗した事例である。

No.4, 6, 7は兄弟で、両親は1970年にプロテスタントに改宗した。No.4は結婚後にカトリックに改宗し、1981年に父が死ぬと、母は残りの子供とともにカトリックに改宗。No.6, 7の兄弟は改宗後にカンレオ集落の娘と結婚した。

No.5は最初の夫がプロテスタントで結婚を機に改宗、後夫は最初からカトリックでカトリック同士の結婚。No.8, 9は、結婚後プロテスタントからカトリックに改宗している。No.10, 14はワット集落姉弟がカンレオ集落と結婚している。姉弟の両親は最初にプロテスタントに従い、夫が死ぬ（1981年）と妻は子とともにカトリックに改宗した。従っていずれもカトリック同士の結婚である。No.11はⅢ章1の事例1の兄弟で、カトリック同士の結婚である。No.13, 17, 18は兄弟で、No.13, 17の配偶者は兄弟である。ワット、カンレオ双方ともカトリック同

士の結婚である。No.16の父はワット集落のプロテスタント信者だった。しかし結婚（1979年）して数年後（1986年）カトリックに改宗した。従って、その子供である No.16はカトリック同士の結婚である。19、20はいずれもカトリック同士の婚姻である。

表3でも示したようにワット集落とカンレオ集落間の婚姻で、宗派が異なるのは6事例であり、いずれも男側が婚姻後に改宗している。というのもチル集団と異なり、婚前交渉に対する戒めは、スレ集団のほうが緩やかである。教会で婚礼を行なったという事例は今調査では集められなかった。同棲状態からそのまま子供が生まれてしまう。結婚は行政機関に対する届け出で決まるのである。従って、教会で婚礼を行なわないので、チル集団の事例〔本多 2012〕のように婿側と嫁側でプロテスタントとカトリックに分かれてしまい、婚礼や結婚披露宴でも同席しないというような状態は発生していない。

## 2. 男女の数

カンレオの男性（ヌハバール集落出身男性 1962年生）によれば、「今の50歳代の人が若かったころは、（カンレオ集落では）男性が少なく女性が多かったので結婚は容易だった。しかし今では男の数が多いため他のところに行かなくてはならない。ほかの民族を選ぶなら男は楽だよ」という。そこでここでは、村民名簿に基づき、本来結婚している年齢に達している未婚女性がどのくらいいるかを検討してみることにする。発言で「50歳代」というので1960－1969年生れにどの程度の未婚者がいるか村民名簿で調べた（表4）。但しこの数値は夫婦どちらかが存命中の者のみであって、すでに死亡した者については入っていないので若干正確性に欠ける。

3組における1960－1969年生の女性総数は35名。うち既婚者は24名、女性未婚者は11名である。そして男性未婚者数は3名である〔trường thôn 2009〕。また表3によれば、1960－1970年生れのワットの男性と結婚しているスレ集団女

表4 年代別男女既婚未婚数

年代＼	カンレオ				ワット			
	男		女		男		女	
	既	未	既	未	既	未	既	未
1960	16	0	24	11	18	0	23	0
1970	15	3	12	7	18	4	18	3
1980	5	2	7	2	2	5	8	1
計	36	5	43	20	38	9	49	4

性は4名いる。

次に4組〔trường thôn 2005〕、5組〔trường thôn 2002〕に居住するワット集落の男性のうち1960－1969年生の男性総数は18名、未婚者は零である。こうしてみると、先ほどのカンレオ集落インフォーマントの主張は間違いではないと言えよう。また、ワット集落のインフォーマント（1960年生）も「カンレオは女が多く、ワットは男が多かった」と述べている。

しかし、表3を見ると1990年以降も、カンレオ集落とワット集落の婚姻は継続して行なわれている。

## 3. 生業と土地不足

今まで見てきたように、戦略邑以降、ワット集落とカンレオ集落では生業が全く異なっていた。それが一時的に合作社時代に共通化したものの、合作社解体後は、また異なる状況になった。それがコーヒーの栽培によって次第に共通点が出てきたのである。コーヒー栽培は1990年に本格化している。水稻耕作ばかりしていたカンレオ集落の人々は遅れてコーヒー栽培を始める。そして水田を回収し始めた1990年代以降、水田だけでなく、コーヒー畑も回収始めている。その例がⅢ－2のチル集団の事例である。これはチル集団だけに限られることではない。

ワット集落のインフォーマント（1957年生）は言う。「カンレオ集落と結婚すれば、無償で土地を借りることができるからさ」また、他のインフォーマント（1961年生）は、「（カンレオ集落は）婿にはただで水田を貸す」という。



以上のことから、ワット集落とカンレオ集落の婚姻は、ワット集落が自らの耕作地をカンレオ集落の回収から逃れるため、あるいは無償貸与を期待して行なわれているといえよう。従って、筆者が学位論文で指摘したように、土地不足が婚姻をもたらす要因として機能しているのである。

## 結

今回の調査の結果、ヴェトナム社会における外因的变化は、一部のスレ集団—ワット集落—の社会にも大きな影響を与えていることが分かった。

表5を参照すると、移住民となったワット集落の人々は、生業面ではチル集団同じになった。しかし土地不足に対する対応は異なった。

チル集団は同じ集落出身の他行政村に住む長老の指導のもと、自分たちの故郷に土地を求めた(Ⅲ-3)。人口の増大にもかかわらず、メーリン社チムクット村、ヒエップタイン社G村ともに新たな耕作地を求めるのは難しく、かつG村では、記述した事例のようにカンレオ集落からのいつ言われるかもしれない土地返還請求が、彼らを不法耕作に駆り立てた。そして、チル集団の場合、女性が男性集落に居住した場合には、その夫婦は男性の集落に所属し、男性の

集落の耕作地を耕作できる。結婚後女性が男家に居住するケースがあった。

スレ集団のワット集落の場合は、地主であるカンレオ集落との婚姻によって土地不足の恐れを解消しようとしたのである。筆者の学位論文では、チル集団が土地不足を解消するために婚姻紐帯を拡大させていくモデルを提示したが、ワット集落の場合、まさにこの行動が当てはまる。

しかし筆者のモデルの場合、チル集団は土地を求めて他のエスニック集団との婚姻もめざしたが、ワット集落の場合には、チル集団との婚姻は求めている(Ⅳ)。その理由は次の点があげられる。第一に、カンレオ集落と結婚することによって得られる利益がチル集団と結婚する場合はない。つまり、同じ土地不足に陥り、またカンレオ集落からいつ土地返還請求を受けるかもしれないチル集団では全く条件が変わらない。第二に、宗教面では、ワット集落は革命後に無宗教になった後、カトリックへと改宗し、カンレオ集落への接近を図っている。第三に、同じ生業を営みながら、チル集団に対する蔑視が消えていない。Ⅳでも触れたが、複数のスレ集団のインフォーマントが、かつては自分たちが慣習として持っていたイトコ婚をチル集団が継続していることに非難している。このように生業が同じになったワット集落の人々は、低くなったチル集団とのエスニック集団間の境界を、自らをスレ集団とするために再構築しているようであった。

以上が調査による成果であったが、本稿の事例数はまだ不足しているので、さらにワット集落とカンレオ集落間の婚姻関係と土地所有関係を詳細に検討し、本稿の結論を補強して行きたい。また、今回の調査地のほかにも、チル集団がスレ集団と混住しているところもあり、調査地を拡大し、スレ集団からみたチル集団との関係、さらには筆者の婚姻拡大モデルの適応範囲を広げることを精査していきたい。

表5 集団別生業の変化

時代\集団	スレ		チル
	カンレオ	ワット	
戦略邑以前	水稻		トウモロコシ
戦略邑	水稻	陸稲, サツマイモ, トウモロコシ	
生産集団	水稻, キャッサバ		
解体後	水稻	水稻, サツマイモ, トウモロコシ	
1990-	水稻	コーヒー, トウモロコシ	
1995-	水稻, コーヒー	コーヒー	

<註>

- (1) チル集団のローマ字表記は地方行政機関によって異なる。ドックチョン県、ラクユオン県については Cil, ドンジュオン県については Cill である。
- (2) 1984年成立。
- (3) 創造神を Ndu (ンドゥ) と呼ぶ [本多 2011]。
- (4) 人口増加と土地不足のために、2006年新たに土地を開拓し、分村する計画が立案され、現在進行中である。
- (5) ボンジャーの人々はヌハバールに来る以前には、もともとクロンの河フィーコー (phi ko) 付近にいたが戦火を逃れて現ラムハー県ダドン社のダンパオ戦略邑に移動し (1962年)、さらに 1965年、ヌハバール戦略邑に移動してきた。
- (6) 反共産勢力のフルロ (FULRO) がラムドン省内では多く活動していた。フルロとは、Front Unifie pour la Lutte des Races Opprimées (被抑圧民族闘争統一戦線) の略。
- (7) インフォーマントの語りでハンフットの人々が到着したと言われる最初の年は1974年。しかし多くの人々は84年に移住してきた。
- (8) 1954年に設立された。
- (9) キン族を対象とする礼拝は5時から7時まで、子供を対象に17時から行われる。
- (10) 少数民族に対する土地権利保証についてはヴェトナム共和国政府の色律033/67の第5条にうたわれている [Cửu Long Giang and Toan Anh 1974 : 199]。
- (11) 1977年にダンキアから移住してきた人々である。
- (12) 1 サオ (sao) = 1,000平方メートル
- (13) カンレオ集落の人々は、少数民族の移住者のみならず、キン族の移住者に対しても同様に返還請求したが、拒絶されている。
- (14) 表1の行政機関側の数値は94戸であるが、実際には家を新築する際に若夫婦が独立したため、実際の戸数との差がある。
- (15) この建設計画による投資は2014年までである [Báo Lâm Đồng 29/5/2008]
- (16) 長老の役割はトリン集団とほぼ同じである。 [本多 2012a : 125] 参照。
- (17) チル集団の女性とキン族の男性の婚姻の1事例を収集できたが、本稿内容と関連性が低いので記録としてとどめるのみとする。興味深いのは、生れてきた女性に対してはチル集団のムポール名をつけ、男子に対してはキン族式の命名がなされていることだった。これは筆者の学位論文で報告したように、他の調査地でも見られる事例であった。

<参考文献>

- Báo Lâm Đồng 2008. 5.29 (ラムドン新聞)
- Bùi Minh Đạo (ed)  
2003 Dân tộc Cơ ho ở Việt Nam, Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học Xã hội. (ヴェトナムにおけるコホー民族)
- Cửu Long Giang and Toan Anh  
1974 *Việt Nam chí lược Miền thượng cao nguyên*, Saigon: Miền trung kiên dũng, Miền nam phú cường. (越南誌略 高原山岳地区)
- Nguyễn Trắc Di  
Đồng bào các sắc tộc thiểu số Việt Nam (Nguồn gốc và phong tục), Saigon: Bộ Phát triển Sắc tộc Ấn hàn. (同胞——ヴェトナム少数民族の各色族 (起源と風俗))
- 本多守  
2006 「ベトナム・チル集団の婚礼の変容—花婿代償を中心に」『白山人類学』9 : 19-40.  
2007 「チル集団のエスニックアイデンティティの変容—婚姻規制と配偶者選択基準の変化」本多守 (編)『ベトナム・ラムドン省のマー族、コホー族の文化—チル集団を中心に—』8-38, 岩田書院。  
2011a 「チル集団の社会変動過程モデル—ヴェトナム・ラムドン省ドンジュオン県の資料より」『白山人類学』14, 213-239.  
2011b 「yang Ndu とは誰?—ヴェトナム少数民族居住区におけるキリスト教の昔話利用法について

て一」東洋大学アジア文化研究所（編）『アジア文化研究所研究年報』第45号，88－99.

2012a「ベトナム・ラムドン省に居住する「トリン」と自称する人々」東洋大学アジア文化研究所（編）『アジア文化研究所研究年報』第46号，123－135.

2012（予定）『ヴェトナムのコホー族：チル集団の社会と儀礼の変容』風響社.

（客員研究員）